

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.136

1995.4.25



■第13回大学院共同セミナー

■知識批判としてのフェミニズム／2

第二波フェミニズム運動と学問世界の変革 ●江原由美子／3～4

フェミニズムによる知識批判、社会批判は言葉の解放から ●

富山太佳夫／4～5

■平成5年度教育プログラム白書／6

業務白書／7

■法人ニュース・千人会／8

■おたより／9

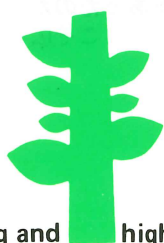
■業務通信／10

大学の授業では学べない本当の心理学が学べる ●佐藤 誠／10

日米の若い建築家たちが「丸太交流」 ●トニー・アトキンス／11

■利用状況／11～12

■館長室から／12



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

知識批判としてのフェミニズム

②

■特別講義

レズビアニズムをどうとらえるか

成城大学文学部助教授 富山太佳夫氏

■講義とシンポジウム

1 知識運動としての第二波フェミニズム

東京都立大学文学部助教授 江原由美子氏

2 ケアと正義

—フェミニズムの規範理論の現在—

跡見学園女子大学文学部教授 川本隆史氏

3 近代における「普遍」と「他者」

—性的差異、人種的差異—

大阪女子大学文学部教員 萩原弘子氏

4 セクシズム・レイシズム・自己決定

広島修道大学文学部助教授 鄭 暎恵氏

【運営委員】

成城大学文学部助教授 富山太佳夫氏

東京都立大学文学部助教授 江原由美子氏

【参加者】 60名25校（内女子53名）

東京都立（4名）、東京女子（5名）、東

京・早稲田・津田塾（各4）、国際基督

教・成城（各3） 筑波・東北・日本女

子・慶応義塾・上智・学習院・桜美林

（各2）、お茶の水女子・千葉・埼玉・明

治・法政・日本・明治学院・成蹊・東洋

英和女学院・専修・神戸女学院（各1）、

その他（8名）

一八世紀ヨーロッパに誕生したフェミ

ニズム運動は、一九世紀半ばから二〇世紀初頭にかけて女性参政権の獲得に代表される女権運動として展開したが、一九六〇年代末から今日に至るフェミニズム運動は新しい動きを見せている。本セミナーでは、この新しい動きを知の運動として、すなわち現代社会における支配と抵抗を示す一つの素材として取り上げることである。

「名前のない問題」から始まった第二波フェミニズムは、様々な知の格闘を経て、現代社会におけるジェンダー・セクシュアリティ・エスニシティ・階級などに関する支配が、「知と身体政治学」としても現われていることを克明に明らかにしてきた。このような格闘の歴史を追うことは、現代社会とは何か、そこにおける支配とは何かを、照らし出すような視点をも提供してくれるに違いない。

専門分化している現在の学問状況、特に大学院教育の閉鎖性に対する反省から出発したこのプログラムにふさわしい学際的なテーマとなった。社会学、歴史学、心理学、英文学、政治学、国際関係論など人文系から社会系まで多様な専攻を持つ院生36名と学部学生16名、それに社会人8名が加わって、総勢60名（25校）の参加者を得て開催された。



女たちの歴史や文化は、どのようにして、既存の学問の中で隠されてきたのか？ 一体、学問という「知」のあり方のどこに、女性たちの社会的経験を隠してしまうような「ものの見方」があったのだろうか。学問に関わろうとする者にとって、このような問いは避けることができない——ようこそ広場にて参加者全員で記念撮影

第二波フェミニズム運動と 学問世界の変革

—大学院共同セミナーを企画して—

東京都立大学人文学部助教授 江原由美子



セミナーの講師陣——右より川本隆史、江原由美子、
富山太佳夫、岡(館長)、萩原弘子、鄭映恵の各氏

第二波フェミニズム運動は、「女性学の創設」など、学問世界の変革運動も伴っていた。そこにおいては、「私たちの歴史や文化を自らの手で掘り起こして語りつたえること」「わたちが自分の生まれ育った歴史や文化を、自らの手にとり返すこと」(井上輝子)が、目指された。では「わたちの歴史や文化」は、どのようにして、既存の学問の中で「隠されてきた」のだろうか？ 一体、学問とい

う「知」のあり方のどこに、女性たちの社会的経験を隠してしまうような「ものの見方」があったのだろうか？ 学問に關わろうとする者にとつて、このような問いは避けることができない。

今回の大学院共同セミナーでは、現在研究者として活躍している人・研究者を屈指している人が一堂に会し、このような問いを巡ってそれぞれの観点から議論した。講師からの問題提起もそれに対する反論を含む意見とともに、深く考えさせられるような論点を含み、暑さを忘れる3日間であった。

セミナーではまず江原(社会学)から、「性別役割分業」の成立／「近代的性別観」の確立／「近代的学問」の成立が、相互に密接に関連しているということを概観する講義がなされた。

続いて川本隆史氏(論理学)が、「ケアと正義」と題して、現代正義論あるいは社会倫理学において展開されているフェミニズム規範理論の焦点を紹介する講義を行なった。

これらの講義の後のシンポジウムでは、セミナー参加者自身の抱えている学問上の関心や問題に即した議論が行なわ

れ、「フェミニズムはなぜ既存の枠組みを借りようとはかりしているのか、それ自体がフェミニズムの後進性のあらわれではないか」などのフェミニズム批判も飛び出した。

また、既存の学科の中では女性問題に關連するテーマを選択しにくい、出産・子育てと研究を両立しにくい、就職が難しいなど、女性研究者・女性問題研究者の置かれた状況に対する疑問も多く提出され、知識の問題とは同時に知識を生産する社会的組織の問題でもあることをあらためて考えさせられた。

翌日は、萩原弘子氏(美術史)から、性的差異だけでなく人種的差異も考えるべき問題であることを指摘する講義があった。ボーヴォワールは、女性と黒人とともに支配カースト(普遍)によって「他者」とされた存在として類比的に論じた。しかし、このことは、ボーヴォワールがいう「女性」とは白人女性のことであり、また「黒人」とは「黒人男性」のことであることを示している。「白人フェミニスト」は、女性という言葉でもって、自らを語ることを許される。しかし「黒人フェミニスト」は、「黒人」という人種の別を明記せざるをえない(ベル・フックス)。学問が自らを装う「普遍性」とは、このように社会構造的に規定された「特権の集中」の上に成り立っているのである。その「特権の集中」は「性別」だけでなく「人種」や「階級」にも規定されているのである。この萩原氏の問題提

起は、フェミニズム批判をも含むものであるだけに、その後の議論の中心的テーマになった。

午後には、富山太佳夫氏(英文学)が、第一次大戦前後のイギリスの文学におけるレズビアンズムの問題を素材に、ジェンダーとセクシュアリティを文学において読み解く方法論の特別講義があった。

その後、鄭映恵氏(社会学)が、「在日」韓国・朝鮮人の観点からフェミニズムを考えようとすると、問題の把握において「日本人フェミニスト」と対立せざるをえない状況があること、また「日本人フェミニスト」には暗黙の(アメリカの白人フェミニストを絶対視するような)「知の階層性」の認識があり、「在日フェミニスト」にもそれを強いる傾向があることを指摘する講義を行なった。

その後のシンポジウムや第三日目の総括討論では、「人権」「エスニシティ」「セクシュアリティ」「ジェンダー」など様々な観点から、「知の階層性」や「普遍」を僭称する(萩原)現在の「学問」のあり方を問い直すような議論がなされた。

その中で、特に強く指摘されたことは、「学問」を生み出す社会的組織もまた「支配・被支配」という構造を持つ現実社会の一部であり、従って「学問」に關与しようとする人々もまた暗黙にこの社会の「支配・被支配」という構造に根差す視点を身につけていること、そしてその視点はほとんど対自化できないほどに根深い

ものであること、そして「支配・被支配」は重層的な構造をもち、フェミニズムもまた「支配」の側に立つこともありうるということなどである。

議論においては、講師の議論の仕方自体「抑圧」的であるという指摘、フェミニズムは何を求め、いかなる社会を目指すものとしていいのか明らかにすることなしには解放の思想たりえないという指摘、女性たちが今現実になを悩みのような問題を抱えているのか明らかにすることこそフェミニズムの原点であるという指摘、また「知の階層性」を含む女性抑圧の全体構造の理論化が不可欠であるといった指摘などが行なわれた。その

いずれも、個人の経験に基づいたものであるだけに説得力を持つ意見であった。

全体として問題点の指摘に終始し、議論の方向が散逸しがちであったことは否定しえないが、個々の講義や議論においては、文学・社会学・倫理学などそれぞれの領域におけるフェミニズム的観点からの方法論を具体的に明らかにするような論点や、参加者それぞれのこれからの研究にとつて有意義な情報も提供されたのではないかと思う。何よりも、フェミニズムに関心を持つ研究者（とその卵）たちがそれぞれの関心をぶつけあえたことこそが成果であったと思う。

フェミニズムによる知識批判、 社会批判は言葉の解放から

成城大学文学部助教 富山太佳夫

大学セミナー・ハウスには、これまでも何回か学生と一緒に来たことがありました。もっとも、大学院共同セミナーにかかわるのは今回が初めてのことで、何となくためらいと戸惑いはありましたが、ともかく引き受けることになりました。その動機はちよつと不純かもしれませんが、私は教師館の檜の風呂が好きなのです。そして、テレビも何もない部屋で樹々に囲まれて眠るというのが大好きなのです。

セミナーの企画の方は、テーマの設定

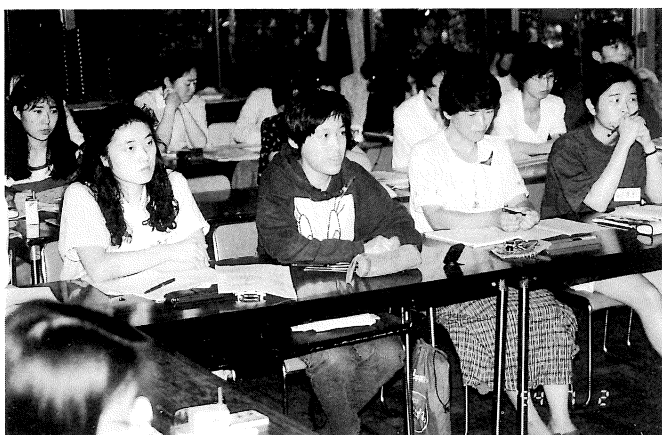
から人選にいたるまで、かつてのお茶の水女子大学の同僚で、私などよりずっと貫禄のある江原由美子さんに任せて、私は司会めいたことを少しだけやり、あとはじつとしていればいいということでした。その分、気は楽でしたが、もちろん不安がなかったわけではありません。その不安というのは、参加して下さる学生の側にフェミニズムについてどれだけの知識があり、それに対してどのような態度でかわつていこうとしているのか予測がつかないということから来るもの



学問を生み出す社会組織もまた重層性をもつ現実社会の「支配・被支配」の一部である以上、学問に関与する人々もまた暗黙にこの構造に根差す視点を身につけている。フェミニズムもまた「支配」の側に立つこともありうることを自覚する必要があるのでは——大学院セミナー館にて

でした。

不安は適中しました。実にさまざまな議論がさまざまな角度からできてきて、最終的にそれらの意見にひとつの方向を与えるのは不可能になってしまいました。ひょっとすると、その点をとらえて、あのセミナーは失敗であったと断ずる参加者があるかもしれません。私はそのような考え方はとりません。フェミニズムの意義とあり方をめぐる論争の現状からして、むしろひとつの明確な方向が出てくることの方が、圧倒的に不自然なのです。それぞれの参加者が持っていたフェミニズムについての考え方、行動のし方に出会って、もう一度考え直すことができれば、



ば、企画した側の一応の目的に達したことになるでしょう。

フェミニズムは決してその思想的内容のみに還元されるものではありません。それはライフ・スタイルの問題であり、議論のし方、言葉の使い方、つまり広い意味でのレトリックにもからむ問題でもあるはずです。それが私の基本の立場です。

私の講演「レズビアンズムをどうとらえるか」の中心的な課題は、要するに、そのような意味でのレトリックをどう読み解くのかということでした。D・H・ロレンスの『狐』（一九三三年）やラドクリフ・ホールズの『孤独の井戸』（一九二八年）の言葉を私が分析してゆくのを聞きながら、遠い国の文学の話だとは思わなかったひとこともありました。そのような誤解は十分に予測し、覚悟していました。それでもなおこのような試みをしたのは、フェミニズムに対するこのようななかたちの知識批判もありうることを知って欲しかったからです。

私は二つのレズビアン小説の周辺に、実際のレズビアン女性の証言や、ハヴェロック・エリスの性医学の言説、バーナード・ホランダーの犯罪学の言説などをならべてみました。それらのさまざまな言説によってレズビアンズムが囲い込まれ、抑圧され、解放を求める様子を見つめようとしたのです。それはただちに、自分の振り回す言葉への反省となつてはね返ってくるのです。レトリック

を分析するというのは、その意味では最も基本的な自己批判のありようなのです。ひとは誰も理性によって反省しない、言葉によって反省するのです。ひとは誰も自我にめざめはしない、言葉にめざめるのです。

わが国の学問は、自然科学にせよ、人文・社会科学にせよ、未だに言葉に対してびっくりするくらい鈍感です。言葉には内容があればいいと思っています。しか

参加者の感想から 自己を見つめ、そして他者と かわることの困難さ

東京都立大学大学院修士課程社会学専攻

小野寺亮子

二日目の分科会では「自分はなぜフェミニズムに関わるのか」「違った立場の人びと（他者）」とどうやったら関わりあうことができるのか」を各人があらためて問い直す時間となっていた。

私は正直なところ語る言葉がなかった。大学院の中にいてルサンチマン（恨みつらみ）からフェミニズムをやっていると揶揄されるのを恐れて、できるだけ「学問」の用語で話すことに慣れつつあったからである。また、西欧中心の理論に対して、現在の（日本の）フェミニズム理論を模索したいと志しながら、そこで対象にしている（日本）には、在日の人たちをはじめ、自分にとって興味のない対象（大都市圏以外、単親家庭、中卒・高卒、障害者など）は含まれていないことを直視することを避けてきたからでもあった。

自己をみつめる方法の一つにCR（Consciousness-Raisingの略）がある。意識

し、かたちを結ばない言葉というものは存在しないのであって、だからこそレトリックに注目する必要があるのです。フェミニズムによる知識批判、社会批判の出発点は、男の牛耳っていた言葉を解放することでした。その作業はもうろん今も続いています。私は聞きたいのです——その解放されつつある言葉を、あなたは誰に対して使おうとしているのですか。そして、どのように？

変革・意識向上・意識高揚運動などと訳されているが、通常5〜15人の女性が、6ヶ月〜2年の間毎週話し合いを行なう。

鄭さんは在日朝鮮人の女性にCRの方法論は合わないという話をした。つまり、アメリカ（中流白人？）の「女性性」は、在日朝鮮人の「女性性」とは異なる。CRは「語られない女性性」を有する文化に適した方法論ではないか。私たちは語って語って語り尽くす文化である。わざわざ「さあ語り合いましう！」とすることに意味はあるのか。

CRが前提にしている「女性性」に疑いを差し挟み、考える契機をもたらしてくれた。CRの前提とする「女性性」とは何だろうか？それと同様の「女性性」を、学問世界でも「普遍」としがちではないのか。在日朝鮮人の「語る女性性」において、フェミニズムが置き放つ対象とは何であるのか。

「自己」をみつめ、「他者」と関わり、そこから「社会」を考え、「政治的」に行動する。そのためのCR。とは言っても、その方法自体が、前提とする文化などを共有していない「他者」（あるいは「自己」）を排除する可能性を持つ。

でも、何が前提とされているのか、それとひき比べて「自分の前提」は何なのだろうか、という答えもすぐにはでない。

平成5年度
教育プログラム白書

平成5年度は表1に示す通り、大学生を中心とするプログラムでは大学院共同セミナーが諸般の都合で実施できなかった他は、例年通り7回(昨年8回)を実施した。国際学生セミナーは4年間続いたシリーズ「地球時代の生き方を求めて」

が終了したが、毎回応募者が殺到し、全員を受け入れることができないほどの盛況ぶりであった。ちなみに参加者総数は405名で1回平均が100名を超え、ともに、留学生数がこれまでで最多の86名を記録した。

表2は、学生を対象とするプログラム計4回の参加状況である。参加者総数は53校(昨年63校)、262名(同445名)であった。そのうち社会人が21%(23%)を占め、社

会人にも開かれたプログラムが定着した。性別比は6対3(4対6)で男子が多くなった。大学共同セミナー3回の平均参加者数は53名(72名)で28%減少したが、今後は大学生の関心の動向を見極めつつ企画を立てたい。

教職員を対象とするプログラムの大学教員懇談会と大学教員研修プログラムは、年間3回を開催し、145名(187名)で22%の減少であった。なお昨年度から年2回

開催の研修プログラムは順調に走り出しているといえよう。

最後に、これらのプログラムの企画・運営にあられた共同セミナー委員会、大学教員懇談会企画委員会、国際プログラム委員会、FDプログラム小委員会の各委員、そして各セミナーで講師としてご奉仕下さった方々にも改めて感謝の意を表したい。

表1 平成5年度教育プログラム開催状況

回数	期 間	主 題	講 師 ・ 運 営 委 員	参加人数
No.161	平成5年 7月2～4日 (2泊3日)	〈会社〉とは何か	鎌田 慧、奥村 宏、*間宮陽介、 佐藤博樹、伊藤正直、木村 敦、 斎藤 修、(桜井哲夫)、(宇波 彰)	51名 (20校)
No.162	10月29～30日 (1泊2日)	ゆらぎの科学	*武者利光、米沢富美子、山本光 璋、桜井邦朋、(野崎昭弘)、(佐 伯 胖)	41名 (12校)
No.163	平成6年 3月11～13日 (2泊3日)	現代人と宗教のゆくえ	青木 保、中林伸浩、越智 貢、 大越愛子、対馬路人、*島 蘭 進、*宮永國子	68名 (32校)

■大学教員懇談会

No. 30	平成5年 10月2～3日 (1泊2日)	いま、大学の理念を問う —どういう人間を育てるのか—	佐野博敏、有馬朗人、奥島孝康、 沖永莊一、岩崎俊一、青木生子、 大口邦雄、(石黒哲郎)、(示村悦 二郎)、(宮腰 賢)、(岡村 浩)、 (高倉 翔)、(西脇威夫)、(平木 典子)、(吉野輝雄)	54名 (34校)
--------	---------------------------	-------------------------------	---	--------------

■大学教員研修プログラム

No. 6	平成5年 9月18～19日 (1泊2日)	よりよい大学教育の方法を求めて —学生と共に授業を創る—	加藤諦三、*宮腰 賢、*亀山純 生、*示村悦二郎、*絹川正吉、(秋 葉裕一)、(鈴木正男)、(建部正義)、 (中田良平)、(原 一雄)、(福田 一郎)、(蛭山道雄)	41名 (26校)
No. 7	平成6年 1月22～23日 (1泊2日)	よりよい大学教育の方法を求めて —カリキュラムの理論と実際—	井門富二夫、佐藤東洋士、(示村 悦二郎)、(中田良平)、(絹川正吉)、 (宮腰 賢)、(福田一郎)、(山内 正平)、(原 一雄)、(亀山純生)、 (蛭山道雄)、(建部正義)	59名 (33校)

■国際学生セミナー

No. 20	平成5年 11月19～21日 (2泊3日)	地球時代の生き方を求めて(4) —変わりつつある世界秩序と 日本—	永井陽之助、神谷万丈、山崎公 士、*寺西俊一、秋山紀子、石井 米雄、竹田いさみ、増田祐司、田 勢康弘、*渡辺昭夫、*高木誠一郎、 (古賀正則)、(山本武彦)	102名 (28校)
--------	-----------------------------	---	--	---------------

注 *印は運営委員を兼ねた講師。() 内は運営委員

表2 平成5年度教育プログラム参加状況

大 学 名	男	女	計	大 学 名	男	女	計
東京外国語大学	19	3	22	中央大学	8	6	14
京大	3	5	8	田経	3	7	3
外大	3	5	8	京経	3	3	3
工業大学	3	3	6	立東	3	3	3
信立	2	2	2	成京	2	1	2
工農		1	1	帝京	1	2	1
女子		1	1	東大	2	1	2
千葉	1	1	2	東大	1	2	1
水産		1	1	日学	1	1	1
海	1		1	明修	1	1	1
東北	1		1	学院	1	1	1
信長	2	1	2	林修	1	1	1
				日学院	1	1	1
				子学院	1	1	1
				済協	1	4	11
国立小計 (15校)	40	21	61	私立小計 (32校)	74	63	137
東京立	3		3	明治短期	1	1	1
都経	1		1	放立	1	1	1
高				ニューヨーク	2	2	2
公立小計 (2校)	4		4	短期・高専・その他 (4校)	4	1	5
国際基督教大学	5	5	10	その他	34	21	55
明治大学	7	1	8	総合計 (53校)	156	106	262
早稲田大学	11	4	15				
山手学院	3	3	6				
日青	4	4	8				
法成	3	5	8				
東理	3	1	4				
慶義	3		3				
上心	2	5	7				
聖女		6	6				
		1	1				

注1. 計4回、第161～163回大学共同セミナー、第20回国際学生セミナー。
注2. 総数262名のうち留学生は18名。

表1 利用者別宿泊人数・グループ数

() 内は前年度

	グループ数	構成比 (%)	宿泊延人数 (人)	構成比 (%)	1グループ 平均人数
会 員 校	520 (502)	51.8	25,181 (25,736)	43.3	33 (35)
非 会 員 校	149 (162)	14.9	9,854 (10,220)	17.0	39 (43)
大 学 連 合	54 (65)	5.4	5,418 (6,448)	9.3	48 (45)
学 術 ・ 教 育 団 体	127 (132)	12.7	8,905 (9,165)	15.3	40 (44)
企 業 ・ 社 会 人 団 体	153 (208)	15.2	8,780 (11,916)	15.1	28 (30)
合 計	1,003 (1,069)	100.0	58,138 (63,485)	100.0	35 (39)

●年間の宿泊利用者五万八、一三八人
平成5年度の宿泊利用者は延べ五万八、一三八人(月平均四、八四五人)、グループ数は一、〇〇三(月平均八四)であった(表1)。開館以来の最多記録となった前年度に比べると、不況のあおりを受けて主として社会人の利用が減少したことから、対前年度比五、三四七人減と

なった。なお、開館から本年度末まで(28年9ヵ月間)の宿泊利用者は延べ一三万三、三三八人、グループ数は二万八、一二六に達した。

図1 利用グループ別宿泊延人数

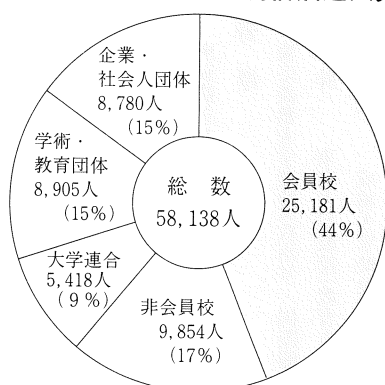
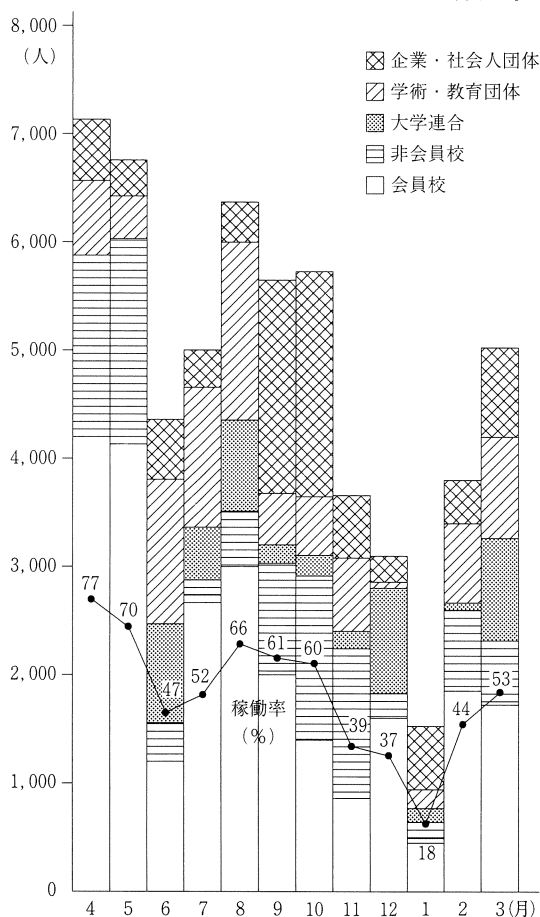


表2 協力会員校最多利用10校

順位	大 学 名	グループ数	順位	大 学 名	宿泊延人数
1	中 央 大 学	59	1	中 央 大 学	3,602
2	東 京 都 立 大 学	32	2	東 京 都 立 大 学	1,073
3	東 京 学 芸 大 学	31	3	学 習 院 大 学	1,026
4	法 政 大 学	28	4	東 京 学 芸 大 学	933
5	早 稲 田 大 学	22	5	早 稲 田 大 学	800
6	東 京 大 学	19	6	東 京 純 心 女 子 短 大	731
7	日 本 大 学	17	7	法 政 大 学	710
8	東 京 理 科 大 学	16	8	日 本 大 学	645
8	学 習 院 大 学	16	9	明 星 大 学	630
8	東 京 外 国 語 大 学	16	10	お 茶 の 水 女 子 大 学	607
8	明 治 大 学	16			
8	立 教 大 学	16			

●グループ別の利用状況
宿泊延人数全体に占めるグループ別の

図2 月別・利用者別宿泊延人数と稼働率



構成比率は図1に示す通りである。「会員校」(本年度末現在、協力会員校・準協力会員校は計68校)は四四・四%(前年度四一・一%)であった。「大学連合」にはハウス主催の各種教育プログラムをはじめ会員校の教師・学生が参加している集会が多いので、「会員校」の利用率は実質的にはこれより高い。「非会員校」を加えると大学関係の利用は計七〇%となるが、一方、「学術・教育団体」にも大学関係者が相当数含まれている。

なお、本年度最多利用の会員校一〇校を表2に示した。グループ数・宿泊延人数とも一、二位は中央大学と東京都立大学の両校が占めている。「学術・教育団体」と「企業・社会人団体」の構成比率は双方で三〇%(前年度三三・三%)であった。生涯学習への関心の高まりを反映して、社会人の自己啓発のための様々な合

宿研修が見られる。

なお、大学関係の利用の主流は、いわゆるゼミ合宿、次にサークル等課外活動の合宿である。また、春季には例年新入学生の合宿研修(オリエンテーション)が連日のように繰り広げられるが、本年度4~7月に実施されたクラス単位以上、学科ないし学部別の合宿は計60グループ(31校)、延べ九、八七一人を数えた。

●年間の稼働率五二・五%
本年度の稼働日数は、年末年始の休館八泊分を差し引いた三五七日で、宿舎の平均稼働率は五二・五%(前年度五七・六%)であった。図2に月別・利用者の利用状況と稼働率を示したが、平均を下回る月は、例年同様、年度の後半、秋から冬にかけて多くなっている。

平成6年度

第1回共同セミナー委員会

'94年6月24日／アルカディア市ヶ谷

【出席者】坂本百大、桜井哲夫、野崎昭弘、伊東孝之、伊藤正直、小森陽一、土屋俊、福岡安則

【ハウス側】岡宏子館長他、企画室スタッフ3名

●主な議事

(1) 新委員の就任、(2) 委員長の選出と副委員長の指名／委員長には野崎委員、副委員長には桜井委員(再任)と宇波委員が指名された、(3) 第13回大学院共同セミナー「知識批判としてのフェミニズム」、第164回大学共同セミナー「ペイトンを読む(仮題)」、第165回大学共同セミナー「フィールド・ワークの実際(仮題)」、第166回大学共同セミナー「生命科学(仮題)」の準備状況について、(4) 平成7年度共同セミナーの企画について

平成6年度

共同セミナー委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

〈委員長〉

野崎昭弘 大妻女子大学教授(情報科学)

〈副委員長〉

桜井哲夫 東京経済大学教授(理論社会学)

宇波 彰 明治学院大学教授(哲学)

〈委員〉

坂本百大 日本大学教授(哲学)

佐藤敬三 埼玉大学教授(科学論)

柴坂寿子

お茶の水女子大学講師(人間行動学)

島蘭 進

早稲田大学教授(宗教学)

伊東孝之

早稲田大学教授(比較政治学)

江原由美子

東京都立大学助教授(社会学・女性論)

草野 厚

慶応義塾大学助教授(政治学・国際関係)

佐伯 胖

東京大学教授(教育方法学)

富山太佳夫

成城大学助教授(英文学)

松井孝典

東京大学助教授(比較惑星学)

○伊藤正直

東京大学教授(日本経済・金融論)

○小森陽一

東京大学助教授(日本近代文学)

○土屋 俊

千葉大学教授(哲学)

○福岡安則

埼玉大学教授(社会学)

平成6年度

大学教員研修プログラム委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

〈委員長〉

示村悦二郎 早稲田大学教授(制御工学)

〈副委員長〉

中田良平 電気通信大学教授(電子工学)

〈委員〉

井下 理 慶応義塾大学助教授(社会心理学)

亀山純生 東京農工大学教授(倫理学)

絹川正吉 国際基督教大学教授(数学)

佐々木一也 立教大学助教授(哲学)

建部正義 中央大学教授(金融論)

原 一雄 亜細亜大学教授(生心理学)

福田一郎 東京女子大学教授(遺伝学)

宮腰 賢

東京学芸大学教授(国語学)

山内正平

千葉大学教授(環境文化史)

蠟山道雄

上智大学教授(国際政治学)

○寺西俊一

一橋大学教授(環境経済学)

千人会

'94年6月8日

◆ご入会ありがとうございました

◇堀川肇殿・J S Y インターナショナル／C

◇宮下文明殿・N T T 東京通信システム営業本部／B

◇山本和子殿・野村証券大森支店／C

◇佐藤東洋士殿・桜美林大学副学長／A

◇岩崎征人殿・武蔵工業大学教授／B

◇松田安弘殿・信州大学教授／C

▼会員数二一、四七二名

◆会費ありがとうございました

相沢忠一、朝野洋一、西澤宗英、桜井育子、中川作一、深海博明、宮川彰、野沢浩、井早康正、藤井耕一、水野弘文、今井義夫、小島守生、佐藤進、齊藤芳郎、江沢洋、林邦夫、安宅光雄、佐藤美喜子、竹内喜代司、島田淳子、大野京子、平山美枝子、秀村欣二、中山昌、高山旭、豊田陽子、柴田勇造、堀部政男、寺内礼治郎、福山直美、西川治、川田侃、嶺哲之助、松平文明、柳下勇、原田富士雄、百瀬宏、田中裕、吉田幸弘、片岡清子、栗林恒雄、高橋勇悦、和田英一、猪瀬尚志、伏見康治、長清子、白井久和、名東孝二、

吉松藤子、金子晃、中野スミ子、武者利光、大内力、柴田政利、弦田実、大友浩、川添利幸、慶谷伸代、今堀和友、二谷貞夫、松岡秀俊、見田宗介、入江和生、岡沢憲美、扇谷尚、島海俊宏、阿部齊、辻達也、松尾秀雄、長浜洋一、三橋文雄、中村浩三、山西貞、朝日信夫、土田美芳、厚東偉介、讃岐和家、中村哲哉、北野美枝子、西村敏男、松島恵、黒田道雄、築田長世、中村幸安、岡宏子、小池滋、中島章、佐藤東洋士、三和治、渡辺芳彦、藤原鎮男、栗原尚子、高村新一、佐久間まゆみ、千住鎮雄、石井進、井上信子、宮川俊彦、小西悟、宮本瑞夫、橋本智、鈴木成文、山口重克、角瀬保雄、金谷憲、窪田富男、石井竹松、田島恵児、梅沢豊、橋本研一、千羽喜代子、奥田夏子、佐藤誠三郎、手塚千鶴子、中島文夫、藤平重雄、橋谷卓成、鶴野省三、稲田拓、三宅彰、吉田美穂子、有末賢、古関彰一、鹿島健次、五十嵐武士、石川信男、笹森健、原誠、林明夫、平出彦仁、松瀬貢規、小倉充夫、松尾浩也、小川信子、田村恭、柏木恵子、大吉芳彦、太田善磨、中村登志哉、宅間宏、森川八洲男、浅井邦二、新井勝紘、古本捷治、原島幸太郎、十代田知三、米村貞蔵、大野澄子、山本茂、関田寛雄、大河内繁男、小沢重男、荻原洋太郎、村田光二、渡辺昭夫、色川大吉、伊藤一郎、高橋公雄、藤田淑子、志賀英(敬称略)

おたより

●毎年自筆のごあいさつを書いて頂いて恐縮です。
（青山学院大学教授・西澤宗英）

●大学共同セミナーの予定がありましたらおしらせいただけたら幸いです。
（日本女子大学附属高等学校・桜井育子）

●セミナー・ハウスとも長い付き合いになりました。小生本年春退官し、只今充電中です。ハウスの発展を祈る。
（元電気通信大学教授・井早康正）

●誕生祝い、美しいカードありがとうございます。
（立正大学へ移り元気であります）

●素敵なカードをありがとうございます。
（お茶の水女子大学教授・島田淳子）

●昨年分と一緒に納めます。フロントの皆様お元気ですか。よろしくお伝えくださいませ。
（セミナー・ハウス元職員・大野京子）

●「しだれ桜と本館」の美しいバースディ・カードを頂き有難う存じました。大学セミナー・ハウスにも御無沙汰しています。大学に新しい世代の方々のご尽力を期待し、お世話役の先生の今後とも力強いご奉仕を願ひ上げます。御身御大切に。
（東京大学名誉教授・秀村欣二）

●しばらく、パリ南大学におり、御無沙汰してしまいました。恐らく11・2年分は納入しなかったと思います。ヨーロッパは文字通り「変化」の時代です。日本は？
（中央大学教授・寺内礼治郎）

●誕生カードを有難う存じます。健康で67歳を迎え日々俳句三昧で過ごしています。
（嶺哲之助）

●本学が何時からか、新入生オリエンテーションで貴施設を利用しなくなりました。こんなすばらしい自然環境に恵まれたセミナー・ハウスを知らずに、学生生活を終わっていると思うと残念でなりません。
（東京医科歯科大学 医科同窓会サービスセンター・栗林恒雄）

●誕生カードをありがとうございます。また緑の中で学生と共に一時を過ごさせて頂きたい、と願っております。

●（中央大学教授・原田富士雄）
●ありがとうございます。おかげさまで元気がですが緑内障で少々不自由なので聞き上手になりたく努力中です。
（日本クリスチャンアカデミー評議員・中野スミ子）

●先日は大勢でお世話になりました。
（大妻女子大学教授・大友浩）

●長い年月のおつきあいになりました。年金を頂く年齢になり若い方々に希望を託す気持です。
（朝日監査法人 島海俊宏）

●熱田の花火は6月5日の夜で、毎年の楽しみです。ペランダから見ております。学生が八王子は遠すぎるといつて、敬遠しますが、そのうちにまた参上します。
（名城大学教授・松尾秀雄）

●健康で誕生日を迎えることが出来た事に淡々と感謝し千人会費を送らせて戴きセミナー・ハウスの増々のご発展をお祈りします。
（東京学芸大学名誉教授・三橋文雄）

●カードご恵送賜り、有難く拝受いたしました。毎年お世話になっております。ますますの発展を祈る！
（早稲田大学教授・厚東偉介）

●昨年はマレーシア、中国と技術指導に出張致して居りましたが、今年は国内にて、生涯現役として、社会貢献のため自分の科学技術をコンサルティング、エンジニア業務を通して努力しています。千人会は昭和43年7月以來です。
（中村技術士事務所・中村哲哉）

●長い間訪れていませんがセミナー・キャンパスもずい分変わったのではないかと思います。
（明治学院大学教授・松島恵）

●先日はバースディ・カードありがとうございます。今年も又、夏にお世話になります。どうぞよろしく願ひします。
（日本女子大学助教授・佐久間まゆみ）

●誕生日カードありがとうございます。定年後の新しい大学にもようやく慣れてきたところです。
（大東文化大学教授・窪田富男）

●カードをありがとうございます。多忙な毎日をご過ごしております。貴ハウスのますますのご発展をお祈り申し上げます。
（東京農工大学教授・橋谷卓成）

●す。悪しからず。ご健勝とご発展を祈りつつ。
（いずみ社・鹿島健次）

●東外大定年まであと1年半、大学セミナー・ハウスでのゼミ合宿もあと二回となりました。
（東京外国語大学教授・原誠）

●お暑い日が続いております。お変わりなくいらつしやいましょうか。セミナー・ハウスの木陰がなつかしく感じられます。
（日本女子大学教授・小川信子）

●早いもので東京で23度目の夏を迎えました。さすがにこの猛暑は体にこたえ、予定の原稿もままならない状況です。
（共同通信社外信部記者・中村登志哉）

●岡先生より古稀の祝いのお言葉を頂き恐縮しております。ありがとうございます。これからも少しでも社会のお役に立つよう努めたいと思います。
（早稲田大学名誉教授・浅井邦二）

●ついに50歳です。学生時代にはじめてセミナー・ハウスを使つて以来、30年近い歳月が経ちました。歴博での仕事も来年3月の展示室開室に向けて正念場を迎えています。
（国立歴史民族博物館助教授・新井勝紘）

●誕生日カードどうも有難うございました。暑い日が続いております。皆様の御健勝をお祈り申し上げます。
（早稲田大学教授・米村貞蔵）

●岡先生のご健康を念じつつ日頃の感謝の思いを託します。
（聖心女子専門学校・大野澄子）

●この7月に、岩波書店から『元朝秘史』（新書）を出版しました。
（東京外国語大学名誉教授・小沢重男）

●旅行をしており送金遅くなりました。益々のご発展を祈り上げます。
（日本女子大学教授・志賀英）



’94年に実施された「新入生オリエンテーション合宿」（4～7月）は計57グループ（30校）、宿泊参加者は延べ9,117人（内教職員772人、上級生758人）だった。写真は6月はじめに行なわれた学習院大学政治学科基礎演習の合同オリエンテーションセミナーでの閉会式風景。（’94.6.5 / 野外ステージ）

94年6・7・8月の合宿研修から

普段の場を離れ、この大きな自然の中で、講義を聴いたり、グループで話し合ったり、そしてみんなで生活を共にする——大学セミナー・ハウスで、私達は人と人とのつながり、そして自己の向上など、いつもはなかなかその機会が得られないが、これら大切なことを深く考えることができました……

右は6月はじめ、帝京山梨看護専門学校が行なった「校外研修」の閉会式で、学生委員が「ハウスへのお礼」の中で述べた言葉の一部である。夏3ヵ月、ハウスで宿泊研修をされた方は計二六〇グループ・延べ二万八、五二〇人。そのうち、どれだけの方々が同様の感想をもつてこの丘を下りて行かれたのだろうか。

●「自己を知り、他人を理解する」

右の看護専門学校の学生一人一人が手にしていた合宿の「要項」は、次のようなメッセージで始められていた。

「目的」改めて自己を見つめなおし、また友人の良さを発見し、自己の向上を目指す。

「目標」①人の話を聴くことができる②自分の思っていることを表現できる③相手の立場に立つて物事が考えられる④人と人とのつながり、友人というものを改めて考えることができる(⑤⑥は省略)。

人格的接触を図りながら密度の深いコミュニケーションをもとうというのは、ハウスでのすべての「合宿」が目指すところであらう。

実は、この「自他の理解を助ける」ことをより意識的に、より学問的に探求しかつ体験しようという合宿が、近年益々盛んである。エンカウンターグループと

も呼ばれる「人間関係」ゼミ(ワークシヨップ)で、ハウスの環境と諸条件がそれらの合宿に殊更に好適な場を供するともいわれている。日本大学心理学科佐藤誠教授が数年来続けておられるゼミもその一つである。べわたしたちの合宿(欄下掲)で、7月なかばの同ゼミの二泊三日を佐藤先生からご紹介いただいた。

●丸太40本と縄を使った国際交流

ペンシルベニア大学の大学院生達と共同で丸太のシェルダー制作の作業をしたことは、建築学セミナーの参加者たちにとっても新鮮な体験で、これからの仕事はもとより、人生の上にも必ず生かされていくものと思っています……

これは「建築セミナー94」の終了後、実行委員長の波多野健郎氏から寄せられた礼状の一部である。こちらは日米の若い建築家たちの「丸太交流」——身振り手振りでのコミュニケーションを交えての割り箸による模型制作から、グラウンドでの丸太40本を使つてのシェルダー構築まで。(私の国際交流欄(次頁)では、このユニークな交流の顛末をペンシルベニア大学建築学科講師のトニー・アトキン先生からご紹介いただいた。

●人格の発達と結合した美術教育を!

多彩な夏の研修風景の中で、一際異色と思われたのは、美術教育を進める会が8月なかばに実施した全国図工・美術教育研究会。中・高校、養護学校等の教員、保育者、大学関係者ら160名が二泊し、その間、手仕事祭では竹を素材に各種の作品を作ったり(表紙写真)、持ち寄った土器の作品を野焼きするなど実技に取り組んだ。そこには全員が実に生き生きと「参加」する「美術教育」があった。

わたしたちの合宿

大学の授業では学べない 本当の心理学が学べる

日本大学教授 佐藤 誠

ここ数年、ジュニア・ゼミの合宿は八王子の大学セミナー・ハウスで開催している。これは、学校のカリキュラムにはのっていない自主ゼミである。始まりは今から14年前になる。「授業をし・結果をテストし・評価する」という学校の発想には

なじまない「対人関係実習」をやってみようとの考えで始めた。毎年春に「自己を知り、他人を理解するために!」という合宿に参加してみませんか」というポスターを貼る。人数は24人(2・3・4・6・8・12

と、いろいろの組み合わせができるから)に限定している。場所は、以前は日本大学の研修所の方々使ったが、どうしても「日本大学研修所→大学→授業→テスト→評価」という亡霊から逃れられない感じなので、非日常的イメージを持てるようにという配慮から、この大学セミナー・ハウスでやることにしたのである。参加する学生は、新入りの1年生から大学院生まで(今年は新卒業生もひとりいた)である。学年の上下は、全く関係しない。

一方、二泊三日の体験学習を共にするスタッフは、私の外、シニア・コースの学生である。シニア・コースは、ジュニア・コースの経験があつて希望すれば誰でも入れる(例年



二泊三日の体験学習を終えて——全員の晴れやかな表情が印象的。前列右から4人目が佐藤先生。(94.7.20/本館前広場)

(なお、シニアの学生は、この合宿だけでなく年間を通して自主的に研究テーマを決めて勉強をしている)。「大学の授業では得られなかった本当の心理学が学べた」といった学生もあり(お世辞かな)。「学校とここでは全く別人だ、先生は二重人格者ではないか」といった学生もいた。また、食堂でたまたま隣り合わせた他のグループの外国の方と話し合ったのがきっかけで、外国の大学院へ留学する決心をした学生もいる。

なお、ジュニアとシニアを通り卒業した学生の中には、心理臨床の現場で働いている専門家たちで作っている「佐藤ゼミOB会」へ入る者もある。結局、大学での教育には卒業年限があるが、対人関係は一生ものであり、評価などすべきではなく、ホンネで付き合わなければならないことである。他人のこととわからないということである。私達にとって先生・学生の区別もなく、ホンネで付き合う実験室がこの大学セミナー・ハウスなのである。

日米の若い建築家たちが“丸太交流”

ペンシルベニア大学建築学科講師 トニー・アトキン

ここ3年来、ペンシルベニア大学建築学科「サマースタジオ・イン・ジャパン」(夏期設計授業)の大学院生たちは、毎年6月中旬、大学セミナー・ハウスで開かれる新日本建築家協会(JIA)主催のワークショップに合流させてもらっている。今年は日本の若い建築家たちと共同で一つの構築物をデザインして、建設するワークショップだった。それはセミナー・ハウス南端「大浜岬」下の野原で行なわれ、丸山欣也(ペン大学客員教授・早大講師)、遠藤精一(早大講師)の両氏、そして私トニー・アトキンが指導に当たった。

まず初日はセミナー室でグループごとにデザイン案をまとめる作業が行なわれた。日本人60名が各6人ずつ10チームに分かれ、各チームにベシ大生1〜2名が加わった。最初は言葉の違いが問題となったが、すぐにジェスチャーやスケッチなどでコミュニケーションが可能となった。あるチームでは初め英語は通じなく、しばらくしてまたま双方にイタリア語を話せる人がいることが分かり、以後イタリア語を媒介にアイディアのやりとりがスムーズにいくようになった。与えられた課題は丸太足場用・40本とロープで組み立

てる東屋のデザインを、割り箸を利用した模型とスケッチで提案することである。数々の模型を囲んで各チームのデイスカッションは深夜におよんだ。そして翌朝、作品の発表会が開かれた。全員による投票が行なわれ、その日の午後、早速、選ばれた案で全員が建設に取りかかった。

入選作「ダイナエッグ」は、足場の丸太を一つひとつ注意深く編んだ三角形を、数学的に積み上げ、最後にアーチ型の東屋になるというもので、その中に坐り、時にはその上に登るなどして集う——出合いの場を目指すものであった。野原では全員が心を合わせ、全力を結集させて——あたかも丸太一本一本が組み合わさってこの構築物が出来るようになる様子そのままだ——この若い建築家と学生たちは、たった3時間でこれを完成させた。それはまさに感動的な構築物で、この野原に威風を放った。あたかも毛を逆立てた巨獣が、いま、その地面から生まれ出たもののようであった。

しばしの観照と写真撮影のあと、この構築物は崩れ落ちてしまった。これに登った数人の重量には耐えられなかったのだ。みんながその残骸に坐って、その構造上の欠陥から学ぶべき教訓は何かを話し合った。そして最後に全員が食堂に集合。夕食を共にして「丸太交流」をお祝いした。まさにこのワークショップでの一連の共同作業が、わたくしたちの交流を大いに深めてくれたのである。来年もさらに「丸太交流」を発展させたい。

(丸山欣也記)

利用状況

’94年6月〜8月
*11月2回利用
日帰りを除く

目黒星美学園小学校教員研修
八千代国際大学・駒沢女子大学合同
ゼミ

日本女子大学附属高等学校
国際学生セミナー同窓会
複合糖質若手の会
日豪学生交換連盟
蛋白質構造理論勉強会
第22回日豪合同セミナー
第15回日豪合同セミナー
Y.Y.ワークショップ
日本機械学会モータ解析研究会
基督教児童福祉会
朝日カルチャーセンター
東京からだところの会
大学天文連盟変光星分科会
新日本建築家協会関東甲信越支部
国際小児保健医療研究会
ルソール合奏団
曹洞宗国際ボランティア会
ゾマ* / 東京都共済農業協同組合
連合会 / テクニカル・サプライ / アイワールド / 薬品本堂 / ヒューマン
ライフセンター / 安川電機 / エル
東京福祉 / 積水ハウス / ケンウッド
(個人利用)

日本デイスレキシア協会

明治学院大学 教授 青山 隆子
大阪市役所 根来 譲二

東京学芸大学 助教授 畑中 佳樹
帝京大学 助教授 堀井 啓幸
桜美林大学 助教授 石田 高生
東京都立大学 助教授 柳田 辰雄
東京都立大学 建築学科 新入生オリエンテーション

明治学院大学 教授 宮野 彬
東京学芸大学 助教授 浅沼 茂
国際基督教大学 心理学 サマーセミナー

中央大学 教授 齊藤 良夫
国際基督教大学 学部課長 研修会
恵泉女子学園 短期大学 英文学科 総合科目「国際」

国際基督教大学 教授 渡部 力
東京大学 助教授 上野千鶴子

東京学芸大学 助教授 齊藤 良夫
帝京大学 助教授 堀井 啓幸
桜美林大学 助教授 石田 高生
東京都立大学 助教授 柳田 辰雄
東京都立大学 建築学科 新入生オリエンテーション

明治学院大学 教授 宮野 彬
東京学芸大学 助教授 浅沼 茂
国際基督教大学 心理学 サマーセミナー

中央大学 教授 齊藤 良夫
国際基督教大学 学部課長 研修会
恵泉女子学園 短期大学 英文学科 総合科目「国際」

国際基督教大学 教授 渡部 力
東京大学 助教授 上野千鶴子

東京学芸大学 助教授 齊藤 良夫
帝京大学 助教授 堀井 啓幸
桜美林大学 助教授 石田 高生
東京都立大学 助教授 柳田 辰雄
東京都立大学 建築学科 新入生オリエンテーション

明治学院大学 教授 宮野 彬
東京学芸大学 助教授 浅沼 茂
国際基督教大学 心理学 サマーセミナー

中央大学 教授 齊藤 良夫
国際基督教大学 学部課長 研修会
恵泉女子学園 短期大学 英文学科 総合科目「国際」

国際基督教大学 教授 渡部 力
東京大学 助教授 上野千鶴子



【初日】割り箸を使つての模型製作には、身ぶり手振りのコミュニケーションも。後方に立って見守るのがアトキン先生。(’94. 6. 17 / 大セミナー室)



【二日目】共同作業でついに完成した“国際交流のシェルター”の下で記念撮影する日米の参加者たち。(’94. 6. 18 / キャンプファイヤール場)

- 東京大学教授 平野 敏右
慶応義塾大学教授 笠井 昭次
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
白梅学園短期大学保育科
東京大学助教授 石田 勇治
成蹊大学北京大学短期留学
筑波大学山とスキーの会タウンヒル
上智大学講師 栗原 悟
東京学芸大学助教授 今井 康雄
中央大学エクス・マルセイユ大学短期留学研修会
東京理科大学Ⅱ部物理研究部
日本大学教授 佐藤 誠
お茶の水女子大学助教授
駒沢大学教授 秋山 光文
学習院大学教授 寺中 良二
桜美林大学教授 島野 卓爾
東京大学法律相談所 徳久 球雄
明治学院大学教授 増田 茂樹
明治大学教授 播 里枝
慶応義塾大学合唱団コール・メロディオン
慶応義塾大学助教授 中込 昌孝
千葉大学助教授 菅原 憲二
中央大学教授 土方 直史
津田塾大学助教授 村上 健
東京学芸大学講師 丹 陽子
東京大学講師 川人 博
芝浦工業大学環境システム学科新入生オリエンテーション
東京大学Jr. 勉強会 國分 康孝
筑波大学教授 早稲田大学コンツェルト
中央大学通信教育部 山本 證
武蔵野女子大学教授 山本 清隆
和光大学助教授 山本 清隆
東京高尾看護専門学校
東京工科大学情報処理科
サムスク・オブ・ジャパン(台湾・明德高校日本語研修)
大東文化大学教授 永井 健晴
山梨学院大学助教授 布川 玲子
第13回大学院共同セミナー
郡内研究会
マックス・ヴェーバー「ロシア革命
- 論」研究会
合同臨床研究会
都市社会地理研究会
蛋白質輸送若手セミナー
日本精神科看護技術協会
日本ワイルド読書会
チロドール読書会
国際教育交流協会
関東地方子ども劇場おやこ劇場連絡会
信頼性設計技術ワークショップ
東京都レクリエーション協会
基督教児童福祉会
中野バプテスト教会
金沢キリスト教会
文学教育研究者集団
東電学園大学部
FORUM寺子屋
ドラゴン/日産クレジット/日本LCA/東京都共済農業協同組合連合会* /コニカカラー機材/日本インフォメーション・エンジニアリング/ウチダユニコム/カシオ計算機/バン工業用品* /東芝府中協力会/日本クレジットサービス*
(個人利用)
東京都立科学技術大学客員教授
V研究会* G・ライスナー
■8月(103グループ、六、八二八人)
立教大学文学部集中合同講義A
東京工業高等専門学校韓国専門大学
研修生
法政大学助教授 尾川 浩一
立教大学助教授 山田耕之介
法政大学助教授 齊藤 利通
国際基督教大学教育セミナー
東京農工大学工学部学生自治会
武蔵工業大学放電工学研究室
筑波大学講師 甲斐 憲次
埼玉大学助教授 井門 俊治
明治大学教授 原 道生
大妻女子大学教授 平井 一弘
中央大学通信教育部
千葉商科大学サッカー部
成城大学女子タッチフットボール
- チームBOOKS
学習院大学教授 高橋 利宏
芝浦工業大学教授 十代田知三
埼玉大学助教授 山口 和孝
駒沢大学教授 寺中 良二
明星大学通信教育部
東京学芸大学AITC
法政大学近代法批判ゼミ
千葉大学教授 田中 國昭
中央大学教授 長谷川幸生
東京大学教授 見田 宗介
慶応義塾大学英語会* 星野 誉夫
武蔵大学教授 杏林大学囲碁・将棋同好会
中央大学大学院制度改革検討委員会
国際基督教大学教授 G・ペデル
駒沢大学教授 瀬戸岡 紘
明治大学教授 森川八洲男
早稲田大学理工学部英語会
東京学芸大学文章文法研究会
明治学院大学教授 畠山 龍郎
東京エアトラベル専門学校
創価大学教授 山口 和子
二松学舎大学教授 石川 忠久
玉川大学助教授 園田 雅代
帝京技術科学大学助教授 神尾真知子
神奈川県立津久井高等学校演劇部
佼成学園高等学校数学研究同好会
十文字学園女子短期大学箏曲部
東京都立青梅高等学校
八王子市立田木中学校陸上競技部
和光大学教授 服部百合子
社会医学技術学院
明治大学短期大学部講師 高橋 豊治
前橋市立工業短期大学助教授 松井 淳
北関東造形美術専門学校
東京神学大学公開夜間神学講座
フランス語応用普及協会
発展方程式若手セミナー
数論セミナー
物理教育研究会
関東学生都市会議
- 言語研究会
筑波大学グループエンカウunter
郡内研究会
ベルマンコンティニウム
神の教会アジア宣教師会
朝日カルチャーセンター
アンサンブルユースミックス
文学教育研究者集団
高橋聖書集会
荻窪栄光教会
美術教育を進める会
恵みバプテスト教会
早稲田無教会集会
相模原めぐみキリスト教会
海老名教会
小平まちづくり研究会
エイ・エフ・エス日本協会
日本写真学会
奇術クラブマジックエコー
英語教育協議会
東京都高等学校英語教育研究会
日本ボビュラー音楽学会
ライフミニストリーズ
ライアの会
日本国際飢餓対策機構
東京都三多摩地区保育連合会
品川区私立幼稚園協会
宮沢賢治読書会
川崎戸手伝道所
数学工房
八南作の会
青山心理臨床教育センター
ドラゴン/九州屋/国際交流サービス協会/アスター精機/国際商事法研究所/アイワールド/いのちのこ
とば社
(個人利用)
日本大学院生 藤岡 大学
一橋大学助教授 坂内 徳明
お茶の水女子大学助教授
吉野蘭科 栗原 尚子
V研究会 佐野 明子
明治学院大学教授 吉本 昌司
神保 信一

●館長室から●

「誰か私に時間を下さい!」と思わず叫びたくなるような日々が続いてどちらかといえば得意にしていた筈の仕事と時間の配分がどうもうまくいかず、またまた、ニュースのお届けが大幅に遅れてしまいました。このもたつきのなかで、アットという間に構内風景は、雪から花のそれへと大きく変わってしまった次第です。生まれてはじめて見る雪に、断食中の空腹も忘れたかのように、雪遊びに興じていた長期滞在のマレーシアの留学生達も全員、目的の日本の大学入学を果たして全国に散っていききました。今は満開の枝垂桜の下を、オリエンテーションに入れた代り立ち代り来館する新入学生の初々しい姿が往々見えています。

ついこの間まで霜柱もたつた冷たい土が微妙に温かい色合いを帯びてくると、枯れ木のような冬木立は思い思いの色合いで芽吹きはじめ、食堂の窓からは、梢の上に揚げた布が石灰色から黄緑へと、日に日にその染色を変えていくように見えます。何か優しくささえる感じがする時の流れのこんな自然の黙示が身近にあることで、時間つきの日程表と時計の針やベルの音といった時の刻みのストレスから、辛うじて「平常心」が守られていることを、強く強く感じている此頃です。(岡)

表紙の写真「全国図工・美術教育研究会(美術教育を進める会主催)での手仕事祭り。竹を素材にさまざまな作品作りに取り組む参加者たち(10頁「業務通信」参照)